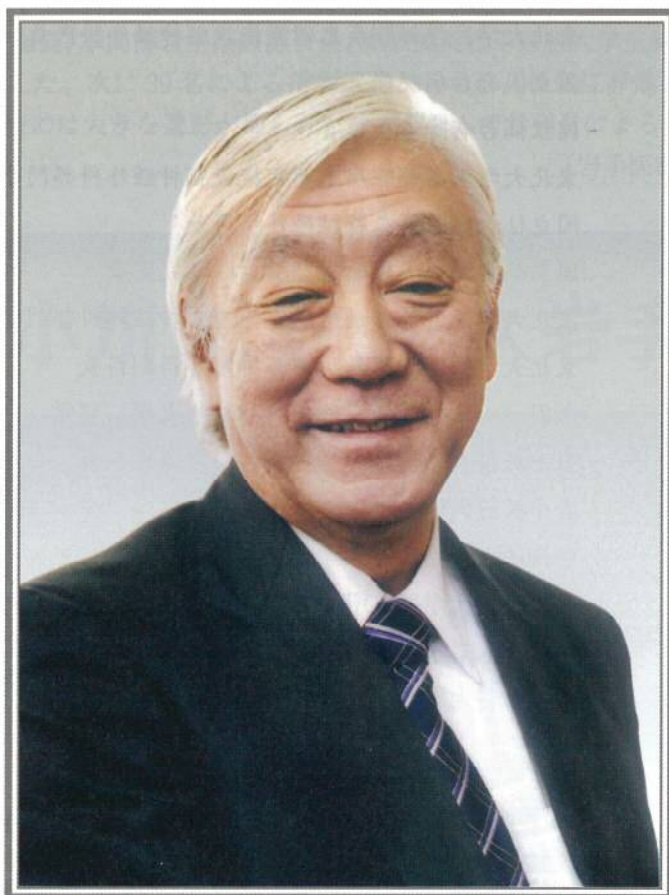


学校法人岩手医科大学 名誉理事長
岩手医科大学 名誉学長
圭陵会 名誉会長



学校法人岩手医科大学前理事長の小川彰先生におかれましては、令和6年3月3日(日)午後9時46分、本学附属病院にて逝去されました。享年76でした。

先生は、昭和24年3月に宮城県でお生まれになり、本学で学生時代を過ごされた後、東北大学、国立国府台病院、国立仙台病院での勤務、米国パロー神経研究所(アリゾナ大学)への留学を経て、平成4年10月に母校である本学に赴任されました。脳神経外科学講座の教授として日々教育・研究・診療に奔走され、平成15年4月に医学部長、平成20年1月に第10代学長に就任され大学の発展にご尽力されました。平成24年2月には第8代理事長に就任され、東日本大震災後の地域医療の再生、看護学部の開設、附属病院の矢巾町移転等に注力し、幾多の大事業を推進させ、今日の本学の雄姿を築き上げました。学外においても(一社)全国医学部長病院長会議会長、(一社)日本私立医科大学協会会長として全国の医学会の発展に寄与されました。ここに生前の多大なるご功績を称えるとともに哀悼の誠を捧げ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

(岩手医科大学報 552号掲載より)

学校法人岩手医科大学葬

本法人名誉理事長・名誉学長 故 小川彰先生の学校法人岩手医科大学葬が6月8日(土)10時30分からトーサイクラシックホール岩手(岩手県民会館)においてしめやかに営まれ、教職員をはじめ学内外から815名が参列し、最後のお別れをしました。葬儀会場へのご臨席が叶わない方に向けては、インターネットライブ配信が行われました(368名視聴)。

法人葬は、葬儀副委員長の小笠原学長による開式の辞で始まり、黙祷の後、葬儀委員長の祖父江理事長が追悼の辞を述べました。続いて、達増拓也岩手県知事、炭山嘉伸日本私立医科大学協会会長・東邦大学理事長、吉本高志東北大学第19代総長、本間博岩手県医師会長、赤坂俊英岩手医科大学圭陵会長から弔辞が捧げられ、多数の弔電が紹介されました。次に39名による指名献花が行われ、祖父江葬儀委員長の挨拶、遺族代表謝辞がありました。正面祭壇には大きな遺影が飾られ、故人を偲んで参列者による献花が行われ閉会となりました。
(岩手医科大学報 554号掲載より)

学校法人岩手医科大学
名誉理事長 名誉学長

故小川彰儀 学校法人岩手医科大学葬



閉	献	遺	葬	指	弔	弔	追	黙	開	式
式	花	族	儀	名	電	電	悼	儀	会	次
		代	委	献	奉	奉	の	の	の	第
		表	員	花	読	辞	辞	禱	辞	
		謝	長							
		辞	挨							
			拶							

追悼の辞

葬儀委員長

学校法人 岩手医科大学 理事長 祖父江 憲治

学校法人岩手医科大学 名誉理事長・名誉学長 故小川 彰先生の御霊前に学校法人岩手医科大学を代表して哀悼の誠を捧げ、謹んでお別れのご挨拶を申し上げます。

先生は、昨年の夏後半に体調を崩され、その後は通院治療を行いながら理事長用務を遂行され、この間、法人会議或いは年頭挨拶の際には、その都度力強いご挨拶を頂戴しておりました。

しかし、ご無理は否めず、本年2月中旬以降はお加減が優れず、入院にて治療を続けておられました。

2月下旬からは、小康状態が続き、3月3日になって急激に血圧が低下し、ご家族が見守られる中、午後9時46分、先生は旅立たれました。

私ども教職員一同、1日も早いご快復を願っておりましただけに、誠に痛恨の極みであります。

献身的な看護を続けて来られたご家族皆様方の悲しみは、いかばかりかとお察し申し上げます。

また、こうして先生の遺影に向かい、永遠のお別れを申し上げなければならないことに、世の無常を感じずにはおれません。

先生は昭和49年、岩手医科大学医学部をご卒業になり、同年5月に東北大学医学部脳疾患研究施設脳神経外科へ入局され、その後国立仙台病院等を経て、昭和63年5月より助教授として東北大学医学部において教育、研究、診療業務に従事された後、平成3年には米国アリゾナ大学バロー神経研究所へ留学されました。帰国後の平成4年10月には岩手医科大学医学部脳神経外科学講座の教授として本学にお戻りになり、平成20年3月までの15年にわたり、同講座の基礎作りと拡充に努められ、多くの優秀な人材を育成されるとともに、地域医療の充実にも奔走されました。

研究・臨床面において、脳卒中はもとより、難病に指定される「もやもや病」などの脳血管障害に対して、病態解析に基づく基礎的研究を通じて、安全な外科治療法を開拓されるとともに、脳神経関連のエキスパート、日本を代表する脳神経外科の名医として多くの患者さんの命を救われてきました。

先生は、平成15年4月に医学部長、平成20年1月には岩手医科大学第10代学長に就任され、平成28年3月まで2期8年間にわたり「誠の人間を育成する」という建学の精神の下、陣頭指揮を執っていただき、本学の実展、地域医療への貢献に尽力されました。

本学の内丸キャンパス1号館3階の大会議室には、岩手県奥州市出身の医師であり、後に官僚・政治家として外務大臣や東京市長を歴任し、その計画規模の大きさから「大風呂敷新平」の異名をとった後藤新平が昭和3年、本学の前身である岩手医学専門学校の開校にあたり、記念講演を行った際に残した直筆の書が掲げられております。

「宇宙はこの手にあり、萬化はこの身に存す」先生はこの書を大変お気に召され、生前、我々教職員に対して「自分たちが世の中を変えて行くのだ」と唱えておられました。先生はその言葉のとおり、自ら様々な

改革を進められました。

特筆すべきは、平成 23 年、学部横断的な連携教育を推進するため、医学部、歯学部の垣根を取り払い、それまで両学部を設置されていた基礎講座を統合し、全国にも類のない新たな枠組みとなる統合基礎講座へと改組したほか、チーム医療が提唱される昨今、我が国で唯一、医、歯、薬、看護の 4 学部を同一キャンパスに有する医療系総合大学として、学生時代からチーム医療の根幹を涵養する多職種連携教育制度を導入されました。

一方、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災津波では、岩手県と連携し、発災直後から県全体の避難所巡回医療活動をリードし、全国から派遣された全ての医療チームを把握した上で、効率よく各避難所に配置するなど、災害時における医療のロジスティクス（一元管理）のモデルを確立された他、自ら基幹病院や避難所を訪問し、被災地の状況を国内外に広く発信するとともに、医療支援や二次災害予防のための衛生管理等、被災地支援に獅子奮迅の活躍をなされました。

この間、学外においては、平成 20 年 5 月より全国医学部長病院長会議の会長を務められ、医師不足対策、診療科間の偏在化、卒後臨床研修制度等に関する課題に真っ向から取り組み、日本の医学、医療の改善向上に取り組まれました。

これら学長在任期間中のご功績に対し、平成 28 年 8 月、岩手医科大学名誉学長の称号を授与されました。

平成 15 年 4 月には、学校法人岩手医科大学理事、評議員、平成 24 年 2 月からは、学長職兼任にて本法人第 8 代理事長に就任。12 年余の永きにわたり、卓越した経営手腕を発揮され、次々と新規事業に着手、大学の拡充発展を通して北東北の地域医療の安定充実に寄与されました。

本学の長い歴史上、最大のプロジェクトともいえるべき総合移転整備計画においては、最新・最先端の生命科学に対応した教育・研究・医療を実施するため、拡張性と利便性の向上を目的に、建学の地、盛岡市内丸から広大な新天地、矢巾町へ大学と附属病院を移転する構想の下、先生の強力なリーダーシップにより、平成 29 年 4 月、念願であった看護学部を開設、令和元年には北東北・北海道で最大級となる 1 千床規模の附属病院を開設、併せて旧附属病院施設を利用した高規格の外来機能を有する内丸メディカルセンターを整備し、北東北の医療中核拠点として地域医療と高度先進医療の推進に尽力されました。

また、理事長在任期間中、学外においては、令和元年 5 月より日本私立医科大学協会の会長に就任され、文部科学省の「今後の医学教育の在り方に関する検討会」、厚生労働省の「医師偏在対策等に関する検討会」等の各種委員として、また、近年は物価高騰や病院における消費税問題、日本における大学の研究力低下、医師の働き方改革等々、諸課題の解決、改善に取り組まれました。

これら理事長在任期間中のご功績により、本年 5 月、本法人 2 人目となる名誉理事長の称号が授与されておられます。

昨今、私立大学を取り巻く社会情勢は、年々厳しさを増しており、先生は近年、学内外において山積する様々な問題の解決に向け精力的に活動されておられ、これら問題が解決途上の中、幽明境を異にされることになり、さぞ無念であったことと拝察いたします。私どもは、先生のご遺志を継ぎ、大学の発展と地域医療の更なる充実のために誠心誠意努力してまいることを御霊前にお誓い申し上げます。

学校法人岩手医科大学葬

先生のご功績は枚挙にいとまがありません。これまでの数多くのご功績により、先生は本年3月、天皇陛下からの勅令による叙位従4位、国家、公共における顕著な功績に対し贈られる叙勲旭日重光章受章の榮譽に浴され、また、岩手県の発展に大きく貢献されたとして岩手県勢功労者表彰を受賞されました。

先生の日本医学界における高い見識、教育者としての熱い情熱、研究者としての真摯な姿勢、地域医療の充実発展に尽くされた深い人類愛に、改めて畏敬の念を禁じ得ません。そして、先生にご薫陶をいただくことができた僥倖に心から感謝申し上げる次第であります。

小川先生と私の私事に渡る話を少し述べさせていただきます。先生が本学教授として帰られた平成4年から2年後、先々代理理事長の大堀勉先生が小川先生と岩手医科大学を近代化する為の改革を開始されました。直後に大堀先生から連絡をいただき、当時、私は大阪大学に居りましたが、この改革に学外からバックアップすることになりました。以来、小川先生は大阪へ出張の折には事ある毎に阪大へお越しいただき、熱く議論し、深夜まで大阪の街を飲み歩き語りあいました。2、3年前に先生が「あの頃は楽しかったですねえ」とよく言われておりましたが、私にとりまして同感でした。

東日本大震災直後に私は本学へ帰学し、小川先生は外回りと財務、私は内回りと役割分担してまいりました。この外回りの13年間に、先生はスーパースターとして大活躍されました。

このように先生とは30年に亙る盟友として、至福の時を過ごさせていただきましたことに感謝申し上げます。

先生。名残は尽きませんが、お別れしなければなりません。

願わくば、ご遺族に対して末永くご加護を賜りますようお願い申し上げますとともに、本法人の前途にいささかも誤りなきようお導き下さいますよう、心からお願い申し上げます。

ここに先生のご遺徳を偲びつつ、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げ、追悼の言葉といたします。

令和6年6月8日 理事長 菅野 浩

